

～旧約聖書を読んで感じること～

## ミレーの「ハガルとイシュマエル」

昔、結婚祝いに友人の神学生の方から、ミレーの「晩鐘」の絵をいただきました。彼は夫婦で祈りなさいと励ましてくれたのです。その額を20年位は部屋に飾っておきましたが、色あせてきました。その他の絵も増えて、押し入れで眠る事態になり、とうとう、エルミタージュに引越す際に多くの絵とともに処分してしまいました。けれどもミレーの絵が好きだという気持ちは変わりません。ミレーの絵は貧しい農民の働く姿、憩う姿、愛らしい姿を素朴な雰囲気の中で描き、「晩鐘」の夫婦で祈る姿は心に響く絵になっていて、大好きです。

父からミレーの画集を譲り受け、眺めていた時、一枚の絵を見て、苦しくなりました。

この画集はフランス語で説明、解説が書かれているので、文字の示す内容はまったく理解できないのですが、タイトルを見て、ハガルとイシュマエルを描いたものだと分かりました。

子どもが倒れこみ、苦しみと悲しみの極致で、必死で訴えるハガルの姿が心を捉えてしまいました。



聖書では、祈るということ、「主の名を呼ぶ」という言葉で表しています。一番最初に「主の名を呼んだ」名前のついている女性は、アブラハムの側女となったハガルです。この絵の主人公です。

信仰の父と呼ばれるアブラハムの妻サラは美しい女性であったと記されていますが、主の名を呼んだということは全く記されていません。むしろ、神の使いの言葉を信じず、あざ笑い、それを指摘されると笑わなかったと強情な嘘をつきます。どうしても子供が欲しいと願って、自分の所有するエジプト人の女奴隷ハガルを側女として差し出し、ハガルが妊娠すると、自分を軽んじるという言い出しをします。

行き場のないハガルが荒野をさまよひ、泉のほとりにたどり着き、そこで御使いの声を聞きます。希望を持つように励まされます。その時、ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、

「あなたこそ、エル・ロイ（わたしを顧みられる神）です」（創世記16：13）

と言ったと記されています。その後もハガルは自分が顧みられたことを忘れることはありませんでした。そして、アブラハムの天幕に戻ります。

サラにも、念願の跡取り息子が与えられました。その時サラは喜び、「わたしが子を産んだ」と誇ります。そして再び邪魔になったハガルとその子を完全に追い払うのです。聖書のどこにサラのいいところが書かれているのでしょうか。ハガルは異邦人エジプトの女であり、アブラハムとの間に生まれた子、イシュマエルに割礼を授けても、信仰を伝えることはありませんでした。サラは、アブラハムに忠実な妻であったことだけは間違いないようです。それだからこそ、イスラエルの歴史が継承されていきました。けれどもその背後に、利用され、踏みつけにされ、捨てられた女ハガルがいたという事実をも、聖書は最初の部分で伝えています。私はハガルのような、ものも言えず、ただ仕えて、闇の中に消し去られたような人々が私の背後にいるということを忘れてはいけなと、つくづく思っています。